

治水への強い決意を胸に、入間川、越辺川、小畔川の

国の直轄改修工事河川に指定や、三川分流工事の実現など治水に尽力されました。

荒川上流部改修から

100年
1918-2018



原次郎年譜	
1895(明治28)年	埼玉県入間郡三芳野村紺屋に生まれる。
1916(大正5)年	栗原セキと結婚。村の青年団長を務める。 王子製紙社長・大川平三郎の知遇を得る。
1924(大正13)年	洪水のため村は疲弊。 貧乏・病氣・喧嘩をなくす三悪追放運動を展開。
1927(昭和2)年	大川の私費2000円を村民の労賃に当てて堤防が完成。 後に「大川堤」と呼ばれる。
1936(昭和11)年	大川平三郎逝去。
1940(昭和15)年	埼玉県議会議員にトップ当選する。
1941(昭和16)年	・入間川水系改修期成同盟会長になる。 ・大洪水が起こり、川島・川越・古谷・南古谷・芳野一帯は水没。惨状を埼玉県知事に訴え、現場視察を実現。 ・入間郡日東村(現川越市)出身の陸軍次官に水害防止を陳情。内務大臣宛の紹介状を得る。
1943(昭和18)年	入間川・越辺川・小畔川の三河川が同時に国の直轄改修工事河川に指定される。
1988(昭和63)年	肺炎により死去。享年92歳。



人物紹介 原次郎

原次郎が生まれた1895(明治28)年頃の紺屋は農家が80軒ほどの集落でした。入間川、越辺川の氾濫で水害に見舞われ、耕地が泥水につかり、農作物は半分、よくても七分ほど実ればいいという状態だったため、貧しい村でした。

この村の庄屋である原家に生まれ、六代目を継いだ原は、村の惨状を見るにつけ「治水を図り、貧困をなくすこと」を強く心に誓ったといいます。そして、「人間は努力することで不可能を可能にすることができる。きっと、できる、と信じて頑張った。」と残されている言葉のとおり、原の尽力により入間川、越辺川、小畔川は国の直轄改修工事河川に指定され、入間川水系の治水は大きく進展しました。



原次郎先生治水彰功碑

▶ 生涯の恩人「大川平三郎」との出会い

治水への強い決意を胸に成長した原は、村の青年団長を務めていた1916（大正5）年に生涯の恩人となる人物に出会います。製紙王といわれた王子製紙社長・大川平三郎です。

この大川を組合長とし、原を専務とする三芳野村信用購買販売組合は村の貧困をなくすべく努力を重ねますが、原は「やはり水害をなくすしか貧困をなくす道はない」と悟り、いよいよ1927（昭和2）年には大川の援助で後に大川堤と名付けられた堤防を完成させます。

大川は武州瓦斯の経営を託すなど、さらに原に信頼を寄せますが、1936（昭和11）年に亡くなります。原はこの悲しみを乗り越え、1940（昭和15）年に県会議員に当選、翌年の大洪水を機に入間川水系改修期成同盟会長として治水に情熱を傾けました。

1943（昭和18）年には、この熱意が実り、入間川、越辺川、小畔川が国の直轄改修工事河川に指定され、入間川水系の分流工事の実現など治水に尽力しました。



大川平三郎

▶ 三川（入間川、越辺川、小畔川）分流工事

原の尽力により、入間川、越辺川、小畔川が国の直轄改修工事河川に指定され、もともと落合橋の上流で合流していた三川の合流点を下流側に付け替える工事が、1954（昭和29）年に完工しました。これにより、入間川と越辺川の合流点が約2km下流に、越辺川と小畔川の合流点が約1km下流になり、三川がはっきりと分離し洪水がスムーズに流れるようになりました。



改修前



改修後

コラム 武州・入間川プロジェクト

原の創立した武州ガス株式会社、国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所、公益財団法人埼玉県生態系保護協会を主体として、入間川流域で環境保全活動を行っている市民団体等を支援するために活動助成を実施しているものです。

入間川流域で市民の方々の河川や環境・防災および、地域の歴史や将来の姿についての関心を高め、地域社会の活性化を目指します。そのため、河川における自然環境の保全・再生・創出等に関し市民団体等が行う活動やセミナー及び河川環境・防災等に関する学習活動に対して費用の助成を行います。



駿河台大学による
笹ぶせの設置

アクセス

大川堤碑

交通：東武東上線「霞ヶ関駅」下車、車で約15分
住所：埼玉県比企郡川島町下伊草234番地

原次郎先生治水彰功碑

交通：東武東上線「霞ヶ関駅」下車、車で約15分
住所：埼玉県比企郡川島町 落合橋付近



大川堤碑

